



Takashi Yasui 安井 孝

●社団法人愛知県産業廃棄物協会 専務理事



今回は、子供の頃からは始めて囲碁歴50年になるという安井さんです。相性と環境が合ったのか、名古屋市に在職中に鍛えた腕前は4、5段といわれる。昨年は記憶に残る一局としてプロ級の腕前の杉戸氏に勝つ大金星を上げました。

永年、碁で鍛えた精神的なバランス感覚で、愛産協の仕事に忙しくこなす合間をぬって、お話しをお伺いいたしました。



相性と環境が良かった

——4、5段腕の実力と、ほかから聞いてまいりましたが、いつ頃から碁に親しんでらっしゃったのでしょうか。

安井 それが記憶もはっきりしないんですよ。戦中か戦後か（笑）。父親が好きでしてね、よく家へ人を集めてやってました。灯火管制…空襲の激しい頃で…あ、戦中ですねえ（笑）。ラジオも娯楽もない頃ですから、ずーっとそれを見てました。それがきっかけですね。本格的に始めたのは、14、5歳だったと思います。

——心身の成長期ですから、破竹の勢いで上達されたのでは？

安井 いやあ、それほどでもないんですが、親父には一ヵ月くらいで追いつきまして、親父が下手だったんでしょうか（笑）。それとも碁が私に合ってたんでしょうかね。ちょうどその頃、病気で転地療養中の兄が帰って来ましてね、家で静養することになったワケです。格好の相手ができまして、それが上達につながったのかも知れません。兄貴は当時、初段くらいの腕前でしたが、一年かかって追いつきました。

——それはすごいですね。碁や将棋の上手な人は、頭の中に碁盤や将棋盤を置いて、自分でイメージしながら一人勝負ができるという話を聞きましたが、私には想像もつきません。

安井 私はそこまでは行ってませんが、ある程度進めたり、判断することは出来ますね。“手を読む”と言いますからね。まあ、夢中になってる時は夢の中にも碁盤が出て来て石が動いてますね。玉突きなんかでもそうですけど（笑）。熱しやすく冷めやすいタイプなもので、遊びは何でもやりましたよ。

——でも碁は続いてらっしゃる。相性が良かったとおっしゃってましたが、環境も良かった？

安井 そうですね。名古屋市の職員になって、中村区役所に配属されたんですが、昭和26年頃ですから、娯楽もそうないでしょう。若い連中、みんな碁を覚えてね、囲碁クラブを作ろうということになったんですよ。2、30人いましたかね。機関誌みたいなものを作ったりしてね。対抗戦、リーグ戦なんかもやりまして、他の区役所と闘いました。

——当時、名古屋の区役所は幾つくらいあったんでしょう。

安井 確か12区役所だったと思いますね。12区の対抗戦だったのを覚えています。なかなか団体戦では勝てなかったんですが、個人戦では優勝もしました。

——中村区役所に安井あり、だったんですね。

安井 当時の中村の区長さんが強い方でね。よく昼休みに区長室へ呼ばれて碁を打ってました。加藤衛さんとおっしゃって、のちの総務局長さんですが、新聞の対局なんかにもお出になってまして、よく教えていただきました。これは自分にとって、大変幸運なことだったと思っています。

——その頃はどれくらいの実力でいらしたんでしょう。

安井 初段だって言っていたんですよ。勝つことが



好きなもんでね、自分を過小評価して、低い段でやってたわけです(笑)。ところがね、私が高へ異動してから、三級とかだった人がどんどん初段になってね。私がいいた頃は私が初段で押さえつけてたもんだから(笑)。

——区役所の昼休みに碁、というのは、のどかな、古き良き時代という感じがします。

安井 昼休みだから観戦者が多くてね。みんな黙ってないんですね。俺だったらこうする、とか、ああだこうだと。中には自分が石持ちちゃって、勝手に打つ輩がいたりしてね(笑)。岡目八目って言って、ハタで見てる方が手がよく見えるわけです。結構楽しかったですが、それでも、のめり込むほど熱中、というわけではなかったんです。碁会所へ行って打つということもなかったしね。ただ、新聞の対局とか、碁の本はよく読んでましたね。麻雀が好きだった時期もありましたが、碁をやめてしまうということにはなかった。ま、合ってたんでしょね。



思い出に残る一局

——勝負ということに関して、ご自分はどのようなタイプだと思いますか？

「碁歴五十年の大金星」

安井 そうだねえ。私はどっちかというと下手打ちが得意でね。力碁というか、調和より攻撃というんですかね。厳しい碁が打ちたいんです。単刀直入にね。スキをつけてスパッといくのが好きだなあ。でも、やっぱり年と共に柔らかくなって来ますね、碁も（笑）。

——安井専務は昨年、全産連が発行している「INDUST」連載の囲碁対局で、大金星を挙げられたと聞いています。年と共に柔らかくどころか、益々厳しい碁を打たれるのではないですか（笑）。

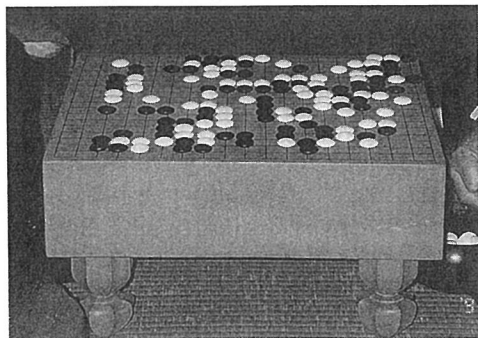
安井 いやあ、お相手はその「INDUST」に自ら対戦記を書いておられる、日本水道工業団体連合会専務理事の杉戸大作さんという方でね、七段くらいの腕前なんです。もうプロ級ですね。金星といえば、金星ですよな。

——その杉戸さんは、どういう碁を打たれる方なんですか。

安井 そりゃ、やはり厳しいですよ。小さなスキさえ見せられません。プロ級にまでなられた方ですから、厳しくて、緻密ですばらしい碁ですよ。今まで囲碁アラカルトの欄で10回対戦して、一度も負けてみえないんですよ。

——それで金星に「大」がついたんですね。

安井 こちらは三目置かせてもらってますからねえ。三目か二目か迷ったんですけどね。それと雑誌に載る対局ということで、非常に



杉戸大作氏との対局（立会人：吉本泰介氏）

緊張しました。いつものように打てなくなるんです。杉戸さんもお強い方だし、私も負けず嫌いだし、昼休みの碁は10分か20分でチョイだけけど、二時間以上もかかりました。長いこと碁をやってますけど、思い出に残る一局になるでしょうねえ。

——スポーツも勝負事だと思んですが、よく「内容が良かったから悔いはない」とか「善戦したから」とかいう言葉を聞きます。安井専務はそのへんはどう思われますか？

安井 碁なんかでも言いますねえ。勝負に勝って碁に負けた、とかね。闘いである以上、私なんかは勝たなきゃ意味がないと思う。でもね、プロの対決で、名局といわれるものを見ると、ああ、この碁は芸術品だな、と感嘆させられるものが、確かにありますよな。譜を見ても、実にその形が美しいわけです。大竹九段という方が「碁は美学だ」とおっしゃったんですが、形の美しい碁というのは品格があります。そういう方達は、こう打てば得だと思っても筋に合わない手は打たない。棋風というものがあるんですね。



碁で鍛えた精神力で頑張る

——奥が深いんですねえ。安井専務の人生にずっと寄り添って来たこの碁ですが、お話を伺ってまして、人とのコミュニケーションにと

でも役立っていたのではないかと。

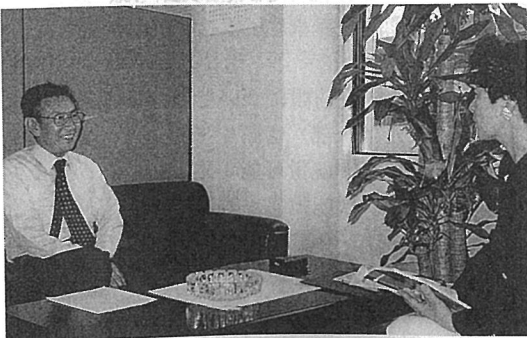
安井 それはありますね。初対面の人と碁を打つことがあります。石で話しているような気がしますね。相手が不利だと、石が泣いているように感じるしねえ（笑）。相手を読みながら進めるでしょう。性格わかってきちゃうんですよ。

——多くを語らなくても“10年の知己”といった感じですね。

安井 最近も連休を利用して、女房と二人、ヨーロッパ旅行に行ったんです。ツアーの中に、夫婦が五組いましたかねえ。移動中、退屈だと思って碁の本を持って行って読んでたら、私と同年くらいの方が「碁、やられますか」って話しかけてくれていますね。その方も本棋院に行って段を取りたいと言われるほどの方でね、話が弾みました。ちょうど名古屋の方で、帰ってきてから金山で待ち合わせて一杯飲みましてね。今度、是非碁をやりましょうということになってるんです。女房同士も仲良くなって食事に行ってるようですが（笑）。

——ああ、いい出会いでしたねえ、碁のおかげで（笑）。お仕事もこのところ大変お忙しいと思うんですが、忙中閑ありでしたね。

安井 うーん、そうですねえ。こちらの協会にお世話になる時は、正直言って第二の職場ということで、気楽にやらせてもらおうと思ってたんですよ。ところが役所時代より益々忙しくなっちゃってねえ。かといって途中で投げ出す様なことはできないですから。



——大変な時期、そして大切な時期ではないですか。

安井 そうなのですが、ご承知の様に、我々の業界は、一部の心ない業者のために、全体の信用を著しく低下させられましたからね。信用というのは一度落とすと、回復するのはなかなか難しいです。こういう時に協会は何をしなきゃならないか、ということもいつも考えてます。会員自身が自覚を持って業界全体のモラルを向上させて、信用回復につとめることが最課題ですね。

——碁で鍛えた頭脳でまだまだ頑張っていただけかないと。

安井 頭脳はどうかわかりませんが、碁をずっとやって来て、精神力というか精神的なバランス感覚は多少は養われたと思ってはいます。

——そして、碁歴50年の成果としての大金星もありました。そして、新たな碁のパートナーもおおできになったようですし、お仕事共々頑張ってください。

安井 碁敵にならなきゃいいですけどねえ。（笑）

INTERVIEWER

花井 美紀

(株)コミュニケーションデザイン代表
イベント司会・コーディネーター、
ビジネスマナーインストラクター、
信用金庫協会女子職員講座の専任講師。
TV、ラジオ等で現在活躍中。



「………碁歴50年の大金星………」